

## 心理臨床カウンセリングルームとの共催事業 思春期発達支援プログラム

### 【グループの成立まで】

子どもはそれぞれ独自の発達経過を持つ。ある程度の幅を持ちながら、多数の人が了解できる行動様式、認知特性を持っている子どもは健常児と呼ばれ、ある程度の幅に収まらない発達のばらつきを持つ子どもは発達障害児と呼ばれる。筆者は独自の発達を遂げている子どもを障害児と呼ぶことにためらいがあり、健常児と呼ばれる子どもの発達の様と比較してばらつきの大きい型を持った子どもを表す言葉として、ここでは発達にアンバランスさを抱える子どもと呼ぶ。

思春期発達支援事業は発達にアンバランスを抱える思春期の子どもとその保護者を対象としたグループワークである。これはもともと、「発達にアンバランスを持つ思春期の子どもへの支援」を研究テーマとしている大学院生の筆者が、ボランティアで個別カウンセリングを行っていた中で、「この子どもさんたちには、同年代の仲間と対等につきあう経験が必要だ」と痛感したところから始まった。指導教官である森茂起教授、カウンセリングルーム事務室課長に相談しつつ準備を進め、二〇〇五年に甲南大学心理臨床カウンセリングルームの事業として始まり、二〇〇七年度より人間科学研究所との共催となった。

発達のアンバランスを抱える子どもは、その特性から年齢相

応の対人スキルを身につけることが困難である。思春期を迎えた彼らは、内的には、「友達と対等につきあいたい」欲求が育っているながら、それを支えるスキルが未成熟で、うまく人と関係を結べずにいるように見えた。それは、辛い体験だろうと想像するのだが、その辛さを自分のものとして感じることも困難なようであった。そのため、友達との関わりがぎこちなくても周囲には平気になり、人との関わりを求めていない子として対応されることになりやすい。そして、自分自身の中でのちぐはぐな感じや周囲とのずれがより大きくなり、本人に混乱が生じることが多いように思われた。その混乱を解きほぐし、子どもたちの中に育っている健全な欲求を適切に満たす経験をさせることができないかと考え出したのがこのグループワークである。必要な経験を積みやすくするために、子ども一人に大学院生一人がサポーターとして付き添ってグループワークを行うことがこのフレンズクラブの大きな特徴である。このサポーターが、子どもの成長にとって大きな鍵となるのだが、この点については別の機会に紹介することにして、ここではこれまでの3年間で行ってきた活動を概説したい。

### 【活動の枠組み】

対象…発達にアンバランスさを抱える小学校五年生～中学校三年生の子どもと保護者。

内容…子どもと保護者並行してそれぞれグループワークを行う。

子どもグループでは、各子どもをサポーター(本学大学院で臨床心理学を専攻する学生)が担当し、二

人一組の形で遊びを展開する。保護者グループには大学院生一〜二名がファシリテーターとして参加し、簡単なワークや子育ての学習を行ったり、日常の子どもとの関わり方を話し合ったりする。初めて参加する親子には、グループワーク参加以前に親子並行の個別インタビュー面接を行い、また、各グループ終了後は参加親子全員に同様の個別フォローアップ面接を設けている。開催期…五月〜七月、十月〜十二月の年間二クール開催。

一つのクールを事前のインタビュー面接↓グループワーク一〇回↓フォローアップ面接で構成している。なお、継続参加者優先で、継続の場合二クール目以降のインタビュー面接は省略する。一グループ四〜七組で活動し、現在、第八クールまでが終了している。これまで参加した親子は十組である。

#### 【子どもグループ】

子どものグループワークは、①ウォーミングアップ、②メインプログラム、③振り返りで構成している。メインプログラムが身体を使うダイナミックな遊びなら、ウォーミングアップは静かなゲームを、前週のメインプログラムがよく動くものなら、今週は座って手先を使う遊びをもつてくるなど、子どもの様子を見ながら、ワーク全体のバランスに配慮して内容を決めている。主に身体を使う遊びとして「ブランケットバレー」(大きなブランケットの周りを取り囲んで縁をつかみ、ブランケットを上下させ、上に置いたボールを落とさないようにはずませる遊

び)、「中当て(円形のドッジボール)」「ミニ運動会」「風船バレー」「人間すごろく(人がコマになって動くすごろく)」など、頭や指先を使う遊びとして「クイズ大会」、「折り紙」、「カラーージュ」など、人と思疎通を図る遊びとして「ジェスチャーゲーム」「伝言ゲーム」など、さらに、自己認識を高める遊びとして「自分の旗作り」などを組み合わせて行う。

こうした分類は子どもたちが主体的にグループに参加できるようなプログラミングに役立たせるためのものであり、どの遊びにも多様で重層的な成長促進要素が含まれている。あらゆる遊びにおいて、子どもが仲間と関われるよう、そして自分の気持ちを実感できるようサポーターが支えている。また、入念な準備をした上で、プログラムを決めないフリーの日を設けてみることもあるが、そうした時に、子どもたちは自ら遊びを構成していく力を見せてくれる。このように、決められた遊びの枠がはずされると、子どもたちそれぞれの特徴がより顕著になり、スタッフは、子どもが潜在的に持っている「育つ力の健やかさ」に驚いたり、子どもが抱える対人関係上の困難を再認識したりする。

#### 【保護者グループ】

保護者のグループワークの内容は、参加者の希望に添う形で進めている。親自身が自分のストレスにうまく対処できるようになりたいと希望があれば、資料を用意して話し合ったり、子どもへの対応を学びたいと希望があれば、ペアレントトレーニングを実施したりする。ストレスに関しては、それぞれの保護

者に適したストレスマネジメント法を見つづけるまでには到っていないが、これまでのところ、子どもとの間でどのような出来事が起こると強いストレスを感じるのか気づくことができたようである。ペアレントトレーニングを実施したグループでは、子どもへの対応を学び、実践したことで、子どもの親に対する信頼感が増し、それにつれて突飛な行動が収まっていったケースもあった。そのほか学校への対応の仕方、自立に向けた進路選択についてなど、実際のな情報交換も行われている。第八グループの保護者グループでは、両親揃って参加する組があり、父親が積極的に意見を述べ、母親の視点を加えてもらう貴重な機会になった。回を重ねる中で、保護者が自分では気づかない我が子の成長を、他の保護者から教えてもらい、喜び合う場面も見られ、このグループが、ピアサポートグループとして成熟しつつある感を抱いている。

#### 【サポーターの活動】

スタッフとして参加している大学院生の働きなくしてはグループは立ち行かない。スタッフは、修士一年の前期に、二年生から指導してもらいながら子どもと関わり、後期では一人でも子どもを担当する。二年になると、一年を指導する立場になる。基本的にこの三グループの活動であるが、希望があれば、二年の後期もスタッフとして関わっている。各回終了後にミーティングを行い、時に自主的に勉強会を開きながら、実践的理解と理論的理解を深めあい、より確かな学びとなるように皆で努力している。限られた時間の中で、子どもの姿を思い浮かべながら

話し合うことは、濃密に子どもと関わる体験なのではないかと思っている。このような経験を通して、私たちスタッフも成長していると感じている。

#### 【研修会】

スタッフの研修として、自主的な勉強会の他に、外から講師を招いて研修会を行っている。フレンズクラブのスタッフに加えて、神戸市教育委員会の教員補助者や、甲南大学大学院の卒業生にも声をかけて、ともに学んでいる。昨年度はえじそんくらぶ奈良『ポップコーン』から代表の楠本伸枝氏を招き、ADHDを持つ子どもを育てることについて、講義していただいた。氏はご自身の子どもの行動に振り回され、困り果てた時期に出会った医師からペアレントトレーニングを受けて救われたそうだ。ペアレントトレーニングは訓練一辺倒ではなく、保護者の辛さを受け止めながら進むものだという氏の話聞きながら、辛い時期を乗り越えようとしている保護者を支えるスキルを持つことができたか、と思われた。昨年度の研修を受けて、今年度はその医師である、奈良教育大学の岩坂英巳教授にペアレントトレーニングを使った保護者支援の方法を模擬セッションも交えて教えていただき、現場で明日から使える具体的方策を得られた。プログラムの緻密さもさることながら、セッションの参加者に「大丈夫、子どもは育つ」と実感させる暖かい雰囲気醸し出しておられ、そのコツも伝授願いたいと思った。

以上、今までの活動を概観したが、継続した関わりの中で見

えてきた子どもたち一人ひとりの持つ困難に“今”寄り添いながら、将来を見据えた効果的な支援をどう導き出していくか、今後も課題として、実践しつつ考え続けたい。

(南野美穂)